

生きることに 対する

話＝小泉文夫（東京芸大・民族音楽学）



合唱はどこにでも

合唱はどこにでもあります。地球上にはさまざまな合唱がありますが、表面的に言うと、合唱というのはただ大勢の人が一緒に歌っているということがあります。

ところがそれらの合唱をみると、現象的にはとてもよく似ている歌い方でも、細かく観察すると何のために合唱するかという目的みたいなもの、それから合唱することによって歌っている人たちがどういう体験をしているかというようなこと、そういう内容が少しづつ民族によって違うんですね。

そのために現象的にはよく似ているのに異質の感動を体験したり、それとは逆に現象の上ではかなり違った感じの合唱でも、実際に合唱を通じて体験している内容には同じようなものがあったり、いろいろなんです。

——合唱を生み出す社会

まず、合唱というものが全然でない人たちがいます。彼らは本来、皆バラバラに生活していて一緒に働いたことがないという人たちです。例えばエスキモーの中で鹿をとるエスキモー（カリブ・エスキモー）のように人間同志が協力しなくても生きていけるような場合には、合唱というものが存在しないんですね。その必要がないし、その気持もない。これがセイロンのヴェツダ族になりますと、実際一緒に歌うということはあるんですが、同じ歌を合唱して歌うということができなくて、一人一人まったく別の歌を同時に歌っちゃうんですね。合唱のための歌がない。それから二人以上の人間が集まるととにかく一緒に歌を歌おうという人たちがいる。ところがそういう人たちの中にまたいろいろありましてね。大きくわけると自然社会の合唱は二つのグループにわかれる。

その一つは例えば台湾の高砂族やバリ島の人々のように、合唱に参加している人間が皆平等の立場にある。そして声の高さや、リズムにしても各人がそれぞれ少しずつ違うことをやりながら、それらの音がうまく合ったり、違ったリズムがいくつも組みあわさったりすることに非常に興味をもっている。このような民族の場合にはいわゆるハーモニーのある合唱が生まれ、さらには対位法のような旋律的な組みあわせをもつものである。

普通こういうグループの社会的特徴としては、部族の長、酋長とかリーダーのようなものがあまり確立していない。皆が平等に、同じような程度でくらしている。村長といっても、村人と同じ家に住んでいて、世襲制でもなく、しかもそんなに大きい権力はもっていない。

ところがこれに対し、もう一方のグループ、大勢の人間が集まって一糸乱れずユニゾンで歌うという歌い方をする

人たちの社会には必ず強烈な支配力があるんですね。

王様とか、酋長とかいう人たちがいて、歌に対して大きな力をもっており、歌をまちがえたりすると殺されてしまったりする。また歌の用途をまちがえて、例えば羊を殺した時に歌う歌を粟の収穫の時に歌ったりすると、皆にバチが当ることになってしまう。極端には命がけで歌を歌うことになる。いずれにしても歌に対する統制力、支配力というもの強い場合、そこではたいして強烈な政治力をもった王様とか酋長が存在することが多い。

これらが自然民族の中における二つの大きなタイプです。今の私たちの社会のようにいろいろな文明の影響とか、あるいは歴史的な発展段階を経験してきたところでは、もちろんユニゾンの歌もあるし、そうでない歌もあるし、ことは簡単に処理できないんです。

——合唱は楽しむためだけではない

合唱する目的というところ、ふつう楽しむのためにやると考えられていますが自然民族の場合、合唱は楽しむだけではないんですね。例えば台湾のブヌン族の場合には首狩に行く前に、ある決まった歌を歌うんですが、これは長老が一番先に歌い出して、あとの人たちがこれにハーモニーをつけていくというものなんです。ところが最初に歌い出した長老は皆が音を出すと同時に今度は違

特集—合唱とは

●合唱でえがく世界地図

う音を出しますから、その音にうまく合うように、まわりの人は音程を変えていく。これは和声学を習った人たちならできるけど、自然民族ではうまくいく時もあるし、いかないう時もある。うまくいかなければ、皆の気持がそろっていないわけだから、そんな時首狩に行っても、逆に首を狩られてしまう。首を狩ることは非常にチームワークがいりますから。で、その日は首狩中止。

こういう場合、合唱というのは自分たちの部族の団結心を試すというか、確認するためにやるんですね。

これは非常に極端な例ですが、その他一般の農耕民の場合でも、ふつう合唱をやるということは単なる喜びというよりも、穀物がよく実ってほしいなどという自分たちの願望とか、生活上の要求と強く結びついていることが多い。それから第二のグループ、支配力というものがはつきりしている社会におけるコントロールのきいた合唱についていうと、合唱はふつう王様の権力を示すためにあるんです。

単に個人の喜びのために歌を歌うんだつたら何も合唱でなくてもかまわない。ところが彼らが合唱をやるっていうのは、まわりにいる大勢の人たちを威圧するような効果を狙っているからですね。それによって歌を歌わしめている政治的指導者とか王権とかの強大さを特に印象づけようとする。

また歌っている人たちは命令だから歌

っている。あるいは王の統率のもとに、自分たちの団結心とか、強さというものを誇示するためにやっている。いずれの場合にも、個人の喜びというものからはほど遠い状況にあるんですね。

——音楽は生活のアクセサリーか？

今日では音楽文化というものは生活のアクセサリーみたいになっていくんですね。音楽なんかやらなくてもくらしでいけるし、友だちと仲良くすることもできる。ふつう合唱をやるかやらないかということは、単なる趣味の問題でしょう？今は。

ところが本来の音楽の姿というのは、人間にとって単なるアクセサリーでもなければ、してもなくてもよいという自由選択的なものでもなかった。友だちと共同して働らかなければ獲物をとることができなとか、合唱で訓練しなければチームワークがうまくいかず、まわりの民族に滅ばされてしまうというように、合唱をしなければならぬという必然性があつたんです。

だから音楽が人間の生活そのものであり、音楽をしているということは生きることなんだという見方ができた。極論すれば、そういう状況においてのみ音楽は真実であり、人間の生きるという内容を表現しているんだと言えるわけですね。

私たちは、社会のいろいろな発展段階を経験した後の人間ですから、いきな

り原始社会の価値観や尺度をそのままあてはめるわけにはいきません。しかし、そういう自然民族の合唱の中から、今日私たちが産業社会で失ってしまったものを再発見し、それを取りもどすことができるんです。

人間にとって合唱とは何であつたか、今はアクセサリーかもしれないし、単なる趣味の問題かもしれないけれど、昔は合唱というものは命がけだったという、その人類の歴史というものを、現代はもう一度ふり返らなくてはならない時代にきていると私は思います。単純に言えば、音楽なんてアクセサリーだという、では人生にとってアクセサリーでないものは何だろう？

今日、人間が生きているとは何だということとが本当に問い直されてしまった。今まで日本人には、音楽をやっているよりずっと有意義なことがたくさんあつたんですね。でも今は合唱することよりもっと価値のあることは何だといわれても誰も簡単には答えられないですよ。そうだとすると再び、生きることと合唱することとは同じことになってくるんだな。

世界の合唱のいろいろ

日本では合唱といえばヨーロッパが本場で、いちばん進んでいると考えられています。そのヨーロッパも実はいろいろで案外知られていない面があります。

ベルカント発声の本山ヨーロッパにも

まったく違う発声法をもつブルガリア
みたいところがあつたりしますから。
ブルガリアを例にとれば、立派なベル
カントの合唱団がある一方では、マケ
ドニア地方の民族発声で統一された合
唱団もある。またそれとは別の、もつ
と粗野な、農民のあるがままの叫び声
みたいな合唱もあります。あんな小さ
な国の中でも、まったく違った、少な
くとも三種類の美しさの基準をもった
合唱があるんですね。

な時には多少ポリフォニックな合唱を
やるけれども、ひとたび公的、儀式的
な合唱となったら、全部が完全なユニ
ゾンになってしまふんですね。
私たちが見ておもしろいのは、ウガ
ンダ辺りに分布しているワトウチミタ
いな、ものすごく体の大きい人たちが
すね。自由な発声法で一人ずつが個性
をもつて歌う。鼻の穴なんかも日本人
に比べ大きいから、声が実に響く。こ
ういうのは私たちが真似しようとして
も体格がそこまでいかないから、実際
むずかしいですね。

ヨーロッパにも東洋と、あるいは古代
とつながりがあるような、民族的な様
相を濃厚に残したものがたくさんあり
ます。ふつう日本の人はヨーロッパの
合唱を移植しようと今までやってきた。
ところがお手本にしているヨーロッパ
ですら実際は非常に多種類の歌い方が
ある。

——開かれたアフリカ

アフリカは開放された歌い方の一番発
達しているところだ。

例えばビグミーのような狩猟民族独特
の発声法。頭声発声と地声とを混ぜた
り、組み合わせたりする。もちろんハ
ーモニのある見事な合唱がある。

また以前のエチオピアのように、宗教
的指導者が同時に政治的権力者でもあ
るといふ、一番支配力の強いスタイル
のところでは、民衆が勝手に歌うよう



——粗野と洗練

世界の文化の歴史から言うと、ここ二、

三百年を除けば、つまり英国の産業革
命以前は、特にヨーロッパが先進国と
いうわけではなかった。文化の先進国
はどこかと言えば、東洋なんです。
あとはアフリカにしろヨーロッパにし

ろ、東洋に比べれば文化的にははるか
に軟弱で、後進国であつたわけです。
従つて東洋には一番発達した音楽が、
非常に洗練された合唱がある。

それはユニゾンですよ。
ちよつと脱線するみたいですけど、東
洋的な尺度でみると、ヨーロッパの対
位法や和声の発達した合唱というのは、
未開社会のなごりなんです。

支配権力が成立する前の未開社会では
各人、各グループがそれぞれの声の高
さで勝手に歌うことが一つの特徴であ
つたわけです。ヨーロッパの場合には
そういう未開社会であつたゲルマン部
族社会が、それ以前のギリシャとか(ロ
ーマは大したことありませんでしたが)、
東洋的なものを含んだビザンチンとい
つた先進文化をとり入れたわけですね。
ゲルマンの部族社会というのは、自然
民族と同じように自由奔放で粗野で、
そしてその合唱も対位法的であり和声
的であつた。そういうものが先進文化
と合わさつたから、あのような面白い
組み合わせができた。

だからヨーロッパ文明は、粗野なもの
と東洋の精神文化とがうまくまじつて
いるという意味では、やはり人類が生
み出した非常に大きな傑作だと言え
るんですね。

ひるがえつてアジアの方は、ヨーロッ
パよりはるかに先進国であつた。けれ
ども、ヨーロッパがもつていたような
ダイナミックな粗野な自然民族の要素
を、早くから洗練されたものに置き換

えてしまった。バイタリティが失われ
ていたということが出来ます。

——ちがいのわかる東洋人

そうしたアジアのオリジナリティは、
ヨーロッパやアフリカでは到達し得な
かつたような、ユニゾンの旋律がもつ
デリケートなメリスマとか、陰影とか
いうものの中にはつきりみられます。

その典型的な例がトルコの合唱。その
ダイナミック、微妙な変化は決してヨ
ーロッパのように強弱のメリハリなど
をあらわにせず、本当の濃淡の具合
でデリケートな表情をつけている。音
の高さにしても、九分の一音を単位と
するきわめて微妙な音程によって旋律
のアーヤをつける。こういうことは、そ
れだけの文化の高さをもたない人にと
つてはほとんど無意味に近いですが、
そのような音楽の尺度をもつ、つまり
耳で区別ができるような人々からする
と、その中に無限の表情をくみとるこ
とができる。

これと対照的なものとしては、例えば
日本の木遣のようなものがあります。
木遣というのは、一方では声明とか催
馬楽とかいうトルコに勝るとも劣らぬ
洗練された合唱形式に対して、日本人
のもっている自然民族的な要素という
ものが反逆しているんですね。上層階
級の洗練された音楽的センスをもたな
い一般の人たちは、それに対して木遣
のようなものをやる。あれはそろわな
いところがいいんですよ。声やリズム

も大体は合っているんだが、本当はみな勝手に歌っている。そういうことによって、非常に大勢が歌っているような大きな大まかな感じが出る。

——合唱の宝庫

東南アジアから太平洋にかけては合唱のあらゆる段階——はじめのべた一番単純な合唱形式から、西洋の和声やポリフォニーの歌い方に匹敵するような、最も発達した形式まで——のものが豊富にみられます。

簡単な方でいくと例えば台湾のヤミ族。ヤミ族では音階は高い音と低い音という二種類しかないのです。しかもその音程は人によってそれぞれ違います。まず仲間の一人が自分の高さで一ふし歌い出す。すると皆が同じ文句を各人の音程でもってくり返す。テンポを合わせるため最初の人が手を打つ。それで皆のリズムが合う。一つの歌が終わると別の人が別の歌を歌い出す。こういうことを一晩中やっているのです。

同じ台湾でも高砂族のように、まわりにいるのも首狩族だから自分たちの団結を強めなくてはならないという段階になると、合唱もより発達していて音程などもそろってきます。それからどの音がハーモニーするか知らないかということを経験上ちゃんと知っていて一番いいハーモニーの音を追求していく和声合唱なんです。

それからリズムの上でもいろいろ組み合わせることによって面白さを出す合唱

があります。インドネシア・バリ島のケチャ、あれは音程はさほど厳しくないが、いろいろなリズムのパターンを網目模様のように組み合わせることによってあれほど精密にできあがったもののはちよつと珍しい。あれも世界の合唱中で、一つの面白いタイプですね。

前も言いましたがバリ島のそういうような合唱ができた背景には、先程の首狩族と同様、共同体的な平等の原則にうらうちされた社会がある。

それからポリネシア始め太平洋上の島々になりますと、合唱も首狩族のような緊張した関係ではなくなるのです。首狩族というのは自分たちのテリトリーを侵されるという危険から、強固な組織をつくる必要がありますが、島に住んでいる人たちにとって外敵はさほどでないから、もつとのどかな結合のし方であることが多い。そういうところから出てくる合唱のスタイルはリズムの上でも、ハーモニーの上でもそんなに厳しくない。今の私たちがみると比較的近づきやすいようです。例えばフィジー島のメケ。

次に南太平洋の島々の合唱のもう一つの特徴は、自分たちの歴史や事蹟、伝説などを伝えるために合唱するというのはたつきがはつきりあることです。それは子守唄に非常に多くみられます。つまりこういう場合合唱は自分たちのコミュニティというものの自覚を強めるために行われている。それらがやがて、生存競争もコミュニ

ティを維持する目的もうすらいでくると、結局は単なる娯楽に近づいていくんですね。合唱が遊戯と結びついていくする。

つまりヤミ族の最も単純なスタイルでしかも生活がかかった合唱から、レクリエーションの合唱まで、あらゆる段階のものが東南アジアから太平洋にかけては分布しているというわけです。



——自然民族の合唱にまなぶ

よく日本の人たちが誤解している点は和声や対位法のある合唱の方が発達している、そうでないものは未開の合唱ではないかと思っていることです。

けれど人類の文化全体をみるとそういうことは言えなくて、普通はユニゾンで歌う方がむしろ高度に発達した文化と結びついていることが多いです。

ただ最近数百年のことを考えると、粗野で自然な合唱のスタイルをもつてい

た西洋の人たちが近代文化をつくり、それが世界に影響を与えたので逆転現象が起ったんですね。

私たちはごく最近をのぞき、長い間東洋の発達した音楽文化の中にいた。だから野蛮をとり戻す必要がある。その時西洋から学ぶこともできるけど、それ以外の自然民族から大いに学ぶ必要がある。

先程の台湾のヤミ族の合唱のようなスタイルであれば割合簡単な努力によってできるわけです。しかしその体験からくる喜びというのは、ベルカントの合唱で味わう喜びとどちらが大きいかなどとくらべられないですね。

だからどちらが発達しているかとか、価値が高いとかいうことを簡単に決めないで、人間が今までやってきたありとあらゆるタイプの合唱をもう一度始めからやり直してみようということに大きな意義がある。

それによって合唱することと生きることとの関係や、合唱を通じて人生というものを体験するというような、人間にとつての合唱本来の意味というものをとり戻さなくてはならないと私は思います。

(5・12 小泉宅にて 富所真知子記)